

理事長の抱負—2期目を迎えて

日本母性看護学会理事長 石井 邦子（千葉県立保健医療大学）

2023年6月、新理事体制がスタートしました。本学会は「母性看護学の進歩発展を図り、女性及び母子とその家族の健康と福祉に貢献すること」を目的に1999年に発足し、来年には25周年を迎えます。この間、母性看護を取り巻く社会情勢は変化し、それに合わせて本会の活動も変貌を遂げてきました。新理事体制では、新理事5名を迎え、新興感染症との共存や2040年問題を念頭におきながら、学会活動を行っていきたいと考えています。

今期の理事会体制において、特に力を入れたいことを紹介します。

まず、母性看護学領域の高度実践看護の推進です。現在、将来構想部会では、高度実践看護の可視化に取り組んでいます。また、高度実践看護推進委員会では、母性看護領域APNブランドデザインに関する提言を取りまとめたところです。今期は、これらを会員の皆様と共有し、

ディスカッションを通して深めていきたいと考えております。

次に、母性看護学に関連する研究活動の推進です。前期に引き続き、若手研究者や母性看護実践者に対する研究助成や相談事業を行うとともに、新たな研究助成制度の導入を検討中です。また、災害発生時の実践・研究活動を支援する新たな制度がスタートしました。会員の皆様の活動の後押しになれば幸いです。

そして、オンラインの活用による会員サービスの充実にも取り組んでいます。研修のライブ配信・オンデマンド配信を拡大し、より利便性が高く、充実したサービスを会員の皆様にお届けします。

会員の皆様の声を学会運営に反映させると共に、活動の成果を社会に還元していけるよう、学会活動への一層のご参加、お力添えを、どうぞよろしくお願い申し上げます。

ポストコロナの母性看護

1. ポストコロナと妊娠期の保健指導の現在

小田 郁代（さいたま市立病院）

臨床現場で働く母性看護専門看護師として、5類になったコロナ感染症と当院の付き合い方についてお伝えしたいと思います。

コロナ禍前の妊娠期の保健指導は、主に集団教育として保健指導を実施していました。しかし、コロナの感染拡大とともに集団教育が難し

くなり、スタッフと相談し、自作の集団指導用のYouTubeを作成することにしました。集団指導を行っていたコロナ禍前は、保健指導のために仕事等を調整して受講していた妊婦さん達にとって、好きな時間に家族と保健指導を受講することができる利点もありました。コロナ感染症が5類に移行した現在では、YouTube視聴も継続しながら、サポーターがいないご夫婦、精神的な支援が必要なご夫婦等へ妊娠期から受け持ち助産師が人形等を用いて、個別の育児指導を行っています。妊娠中からご夫婦へ個別指導を行うことで、受け持ち助産師との関係が濃密となり、入院中や退院後の支援がしやすくなったとスタッフから前向きな声が聞かれます。また、個別に指導を行うことで夫婦それぞれのライフスタイルにあった指導を行うことができること、育児休暇を取得する夫が増えたこ

とも相まって夫婦で同じ育児イメージをつけることができ、育児を協力し合いながら行っている夫婦が増えたこともポジティブな変化です。一方で、後輩育成という点では、アドバンス助産師新規申請の1要件でもある「集団指導」は、妊娠期の集団指導として要件を満たすことが難しくなり、withコロナでの集団教育の再開やあり方についての見直しが今後の課題となっています。

コロナ禍で私たちの日常業務は変わりました。待ち受ける試練に柔軟に対応し、色々なアイデアを出し合いながら、医療スタッフが一人となり変化に対応していくことが妊婦さんにとってよりよい妊娠期の準備になることを信じ、これからも保健指導を進化させていきたいと思っています。

2. ポストコロナの出産の現状

久世 宏美 (社会医療法人愛仁会高槻病院)

2023年5月に5類へ移行し、分娩時の対応を変更した施設も多いと思います。そこで、総合周産期母子医療センターである当院の取り組みや変更したことなどを紹介させていただきます。

2020年6月より夫のみ分娩直前から立ち合いが可能となり、その後も中止・再開を繰り返しましたが、5類となった現在においても分娩立ち合いの基準は変更していません。分娩介助をする助産師は、産婦のバースプランを確認し、分娩期の助産診断を的確に行い、夫の来院を促しています。健康状態、症状の発症・診断の日を確認し、立ち合いや面会可能時期について説明を行います。一般の方と病院における隔離期間の認識の違いにより、納得いただくのに時間を要することがあります。この点については、他施設でも同様に困難を感じているようです。

これまで、専属の助産師が感染者の受け持ちをしていましたが、他患者も受け持つようにな

りました。また、感染者の分娩方法は帝王切開と決めるのではなく、経膈分娩も可能となりました。これに関しては、流行当初から経膈分娩を行っている施設もあります。

当院を含む多くの周産期医療センターでは、分娩入院時のPCR検査を実施しています。陽性産婦から出生した児は隔離対象になるため、分娩後に距離を確保した状態で児の顔をみてもらい、そのままNICUに入院し、72時間後の陰性確認ができるまで隔離となります。産婦の希望があればオンラインでの面会は可能ですが、出産した実感が湧かないという産婦の声もあります。

現状から考えると、従来の状態に戻ったことはありません。これからポストコロナとなり、病院の対応は随時変更されていき、従来 of 医療・看護に戻る面も出てくると思います。

3. ポストコロナの産褥期（分娩施設入院中） の保健指導の在り方

八重樫 秀美（社会福祉法人恩賜財団済生会北上済生会病院）

5類感染症移行後も妊産婦はコロナ感染に注意しながら生活し、少なからず孤立感を感じながら過ごしていると思われます。また、入院中の家族の面会は今も制限しています。

コロナ禍以前は育児手技の指導は希望があれば日常的に家族にも行っていました。今は必要と思われる産婦に限定しています。

しかし、産婦が孤立感を高めることがないように家族を巻き込んだ保健指導は今まで以上に必要と考えます。家族へ感染対策に考慮しながら工夫して保健指導を行っています。

Aさん 40代 初産。両親は県外在住。サポートは夫のみ。

産褥2日目頃から「うまく授乳できない。児が泣き続ける理由がわからない」と流涙あり。担当助産師は「上手にお世話できている」と声をかけ、見守っていたが、退院まで緊張した表情であった。

退院の日、迎えに来る夫に検温・コロナに関する問診・他の母児とコホートするなどの感染対策を取りながら、育児技術の指導を行った。

夫は慣れないながらも積極的に見へ手を伸ばした。夫の大きな手で行う沐浴や授乳、抱っこで児は安心し、入眠した。その様子を見てAさんは「何でも一人でしなくてはと思っていた。周囲に相談する人もおらず、緊張していた」と安堵し、涙を流された。夫も「妻は何でもきちんとする性格なので無理させないように気を付けます」と話され、ご家族3人で退院された。

家族を巻き込んだ保健指導は妊産婦が家族とのつながりを実感できるように、家族のエンパワメントに働きかけるようにしています。ポストコロナとなりその点に特に配慮するようになりました。母性専門看護師としてその必要性を医療スタッフに着実に伝えるようにさらに役割発揮していきたいと考えています。

4. ポストコロナの教育現場

齋藤 いずみ（神戸大学大学院）

皆様の職場は、ポストコロナの現在、いかがでしょうか。私の所属している神戸大学の現状をお伝えいたします。

講義・演習はほとんどが対面形式に戻り、コロナ前の状況に戻っています。遠隔講義の利点も活かしながら適度に、遠隔形式を取り入れているといった状態です。

遠隔を経験したからこそ、対面講義の重要さが身に染みてわかります。特に医学科や保健学科（看護・検査・理学療法・作業）、さらに他

学部が一堂に集まる講義の時は、こういう機会をいただき、この若い学生さん達に講義させていただける環境に本当に感謝しています。300人以上の若い学生さんが集まり交流する教室のエネルギーを感じる時、ポストコロナ時代になり、対面講義のできることを心から喜んでいきます。

学部の教務委員が、新型コロナに感染した学生の個人情報に十分配慮しつつも、待機必要日数などを教員間で共有し、学生に配慮できたこと

はポストコロナの現在も、教員間で学生の細やかな情報を共有するという点では、よい方向に活用されている点もあります。

実習面では、コロナ前は大学病院の看護部と実習関連委員会と、様々な事項を相談決定していました。コロナ以降は大学病院看護部長・教育担当副看護部長と、全看護系教授とが一丸となり、月に1回密接な会議を開催してきました。これによって看護部と看護系の教授会と細やかな交流が生まれました。この4月からは実習関連委員会と看護部の会議に戻っていますが、看

護部と看護専攻の教員が協力し、実習を可能な形態にて実施するという結びつきは、強くなったように思います。

コロナ後は、実習開始前の規定の日数から、また実習中の体調管理が厳格に実施確認されています。これは現在も続いて実施されており、大学生からの新型コロナウイルスの新たな発症は少ない現状ではあります。

研究においては、感染管理を十分にしながら他学部と共同で研究ができる環境に、戻ってきていることを感じております。

5. ポストコロナの研究現場

井上 千晶（島根県立大学）

今年の日本母性看護学会学術集会に対面での参加が叶いました。3年ぶりでしたがとても楽しく有意義な時間で、研究意欲の向上につながると改めて感じました。今年度は多くの学会で対面の学術集会が計画されていますが、現地でも遠隔でも参加できる工夫がなされています。また発表演題数や内容も充実してきていることがわかります。周囲の研究実施状況を見ても、一部制限はあるものの適切な対応により研究実施が可能であることから、研究現場は以前のように戻りつつあると感じています。

私の研究は、対象者さんにマスクを外していただく必要があるため一時中断していましたが、この度ようやく実施の目処がたち、研究に向き合う心持ちを取り戻すことができました。しかし、コロナ以前に作成した研究計画をいざ実施しようとするとう募集方法や倫理的配慮など多くの修正をしなければなりません。さらにク

ラスター発生など感染状況による予定外の活動制限やマスクを外すことへの抵抗感への配慮などまだまだ不確定要素が多く、研究実施の難しさや不便さを感じているところです。またコロナ以前と大きく変化したと思われる人々の行動や意識の影響を検討する必要がありますが、先行研究はほぼなく以前のデータとの比較や解釈が難しくなるのではと考えています。しかしながら、このような現状に対応するための研究計画修正や検討の過程は、研究をよりよい方向に変化させる機会となっています。

ポストコロナの今は、これまでの常識や慣習にとらわれすぎない新しい視点で研究するチャンスだと捉えることができます。コロナ禍で様々な課題を乗り越えてきた皆さんと共に、前向きな気持ちで研究に取り組んで行きたいと思っています。

母性看護 APN の将来像検討プロジェクトの設置について

長坂 桂子 (母性看護 APN 将来像検討プロジェクト・リーダー)

社会の変化を見据え、本邦では高度実践看護 (APN: Advanced Practice Nursing) のあり方に関する議論が活発に行われています。本学会では、2023年度、母性看護APNの将来像検討プロジェクトが始動しました。プロジェクトのミッションは、母性看護学領域における高度実践看護がどうあるべきか、本学会が担うべき役割は何かを議論することです。2024年夏を目前に、「母性看護APNの将来像」に関する本学会の見解をまとめ、第二次報告として作成することをゴールにしています。この前段として、2022年度は、APN委員会に、母性看護APNグラウンドデザインWG¹が付託されました。このWGでは、2040年問題や他団体の動きを念頭に置き、「母性看護領域におけるAPNの役割・活用・育成に関する提言 (案)」を一次報告とし

て作成しました。この一次報告について、会員の皆様から意見を頂戴する機会を設け、加えて、様々な立場・地域でご活躍の皆様にインタビュー協力を賜りながら、二次報告を作成していく予定です。母性看護学領域における高度実践看護の未来に向け、会員の皆様方からのご意見やお知恵を寄せていただけますと幸いです。ご協力、よろしくお願いいたします。

【意見交換会】11月17日 (金) 18～20時オンラインで開催予定

¹ 松原まなみ (リーダー、朝日大学) 赤松房子 (熊本赤十字病院) 長谷川ともみ (富山大学) 長坂桂子 (西武文理大学) 八巻和子 (山梨県医療的ケア児支援センター) スーパーバイザー山本あい子 (兵庫県立大学名誉教授)

第25回日本母性看護学会学術集会報告

第25回学術集会長 坂上 明子 (武蔵野大学)

第25回日本母性看護学会学術集会は、2023年5月28日 (日) に武蔵野大学有明キャンパスで開催致しました。1022名と多くの方に参加登録いただき、4年ぶりの対面開催で、約300名の皆様が会場にお越しくださいました。COVID-19の長期化によって、直接的なコミュニケーションや触れ合いが希薄になり、女性や子どもの健康や権利、生活等の課題がより一層浮き彫りとなっていることから、メインテーマは、「誰ひとり取り残さない“ぬくもり”のある母性看護～研究と実践の円環～」としました。会場では、会長講演、教育講演2題、特別講演、ランチョンセミナー2題、シンポジウムを行いました。これらの他に、教育セミナー5題、市民公開講

座を5月28日から6月30日までオンデマンド配信致しました。

特別講演は、蓮照寺ご住職の松岡満優先生に「願われて生まれ、願われて生きる人生」をテーマにご講演いただきました。教育講演「出生前診断の現在と未来」、「性暴力被害者への継続的支援」と、シンポジウム「持続可能な災害への備え」では、最新のエビデンスや実際の具体的な支援についてご講演いただき、誰ひとり取り残さない、継続的な支援方法を深く考える機会となりました。

一般演題は会場のみで行い、口演16題、示説38題でした。会場は満員で質疑応答や交流は非常に活発でした。優秀賞には研究報告2題、実

実践報告1題が選ばれました。

オンデマンド配信をした教育セミナー5題は、不妊症・不育症カップルへの支援、母体急変時の多職種連携、南アフリカにおけるセクシュアルヘルス支援、骨盤底ケア、特定妊婦への継続的支援についてご講演いただきました。家庭でできる性教育をテーマとした市民公開講座はオンデマンド配信の中では最も多い、1076名の方が視聴してくださいました。

参加者アンケートでは、プログラム全体に対して、「非常に満足」「満足」を合わせて約95%の高評価をいただき、「講演や研究発表が先進的で興味深かった」「助産師として一歩進むための糧となった」等のご感想をいただきました。

一般市民の方からも、「海外の性教育の新しい考え方に衝撃を受けた。親がどのように性教育をしていけばよいのかを学ぶ機会となった」等の感想をいただきました。一方、直接、意見交換する機会とするため、一般演題は対面開催のみとしましたが、「一般演題もオンデマンド配信してほしい」というご意見もあり、課題は今後の学術集会に引き継いでいきたいと思えます。

最後になりましたが、感染状況が落ち着かない中、参加者の皆様、講師・シンポジストの皆様はじめ、多大なるご協力・ご支援を賜りました全ての関係者の皆様に、こころより御礼申し上げます。



特別講演 松岡満優先生（蓮照寺）



教育講演 小西聖子先生（武蔵野大学）



教育講演 林伸彦先生（FMF胎児クリニック東京ベイ幕張）



シンポジウム

第26回日本母性看護学会学術集会のご案内

第26回学術集会長 工藤 美子（兵庫県立大学）



2024年6月16日（日）、兵庫県明石市にあります兵庫県立大学明石看護キャンパスにて、第26回日本母性看護学会学術集会を開催させていただきます。学術集会のテーマは、「女性の“生きる”を支える～Health & Rightsを基軸にして～」と致しました。現在、日本母性看護学会では、産後メンタルヘルスケアのグッドプラクティス、高度な看護実践を明らかにしようと、看護職の方々から事例を通して実践の内容を伺っているのですが、まさに女性たちが自分らしく生きられるようにと、健康と権利保障の側面から支える実践が語られており、産後のメンタルヘルスケアは、女性を保護しエンパワーメントする活動であると感じています。私たち母性看護学を専門とする看護職は、さまざまなライフステージにある女性に関わり、命や暮らしだけでなく、人としての尊厳が保たれているかということも含めてアセスメントし、女性に安全で安心な環境を提供しながら、女性自身が持ち得る能力を十分に発揮できるように支援していることから、このテーマにしました。本学術集会で、女性たちの命や暮らし、尊厳を守ることができる看護について語り合えたらと思っています。

学術集会当日は、対面開催を予定しております。会場では、特別講演、教育講演、シンポジウム、ランチョンセミナー、一般演題発表に加え、理事会企画のセッションを予定しています。また、一般演題以外の会場開催の特別講演、教育講演、シンポジウムは録画し、事前収録した教育講演や市民公開講座と共にオンデマンド配信する予定です。本学術集会で提供する講演やシンポジウムはCLOCMiP®レベルⅢ認証申請に利用可能な必須研修や選択研修として、当日参加ができなかった方々にも役立つ内容を提供したいと考えています。

皆様、是非、日本の縮図といわれる兵庫県に開催日前日から来ていただき、神戸、姫路、淡路島などの名所を訪れ、さまざまに堪能いただきたいと思っています。そして、学術集会当日には、明石の地に足を運んでいただき、皆様とともに「女性の“生きる”を支える」看護について検討したいと思っています。学術集会スタッフ一同、皆様のご参加、心よりお待ち申し上げます。

学術集会事務局（兵庫県立大学看護学部内）

E-mail : jsmn26@cnas.u-hyogo.ac.jp

各委員会からのお知らせ

1. 生涯学習支援委員会

糖代謝異常妊産褥婦への看護支援セミナー (オンデマンド研修) 開催のご案内

糖代謝異常妊産褥婦への看護支援セミナーをオンデマンド開催いたします。また、講義受講と事前事後テストの受験で、CLoCMiP[®]レベルⅢ認証申請に利用可能です。

【対象者】

テーマに関心を持つ看護職（助産師、看護師、保健師）及び栄養士等の医療職

【開催日】

オンデマンド視聴（視聴期間：2023年12月1日（金）～2024年1月31日（水））

【応募期間】

2023年10月2日（月）～11月24日（金）

【参加費】

7,500円（会員、入会手続き中も会員で参加可）、
15,000円（非会員）

【プログラム】

- ① 周産期の糖代謝異常の診断と治療
- ② 糖尿病の食事療法
- ③ 糖代謝異常妊産褥婦の心理・体験
- ④ 糖代謝異常妊産褥婦の看護～周産期の糖代謝異常の血糖コントロールと食事・運動～
- ⑤ 妊娠糖尿病妊産褥婦への支援～事例紹介～
（診療報酬での対応含む）

【問い合わせ先】

日本母性看護学会 生涯学習支援委員会
委員長 山田加奈子
yamadak@omu.ac.jp

2. 高度実践看護推進委員会

1) TSUMUGU会

高度実践看護推進委員会では、臨床と教育・研究の場をつなぎ、母性看護領域における高度実践看護を推進していく目的で、TSUMUGU会For母性看護CNSを年2回、開催しています。2023年度は10月1日に第7回TSUMUGU会を開催し、「無痛分娩について考える～臨床・教育研究者のそれぞれの立場からの報告をもとに～」をテーマに、竹明美氏（京都橋大学）から「無痛分娩に対する助産師の認識～文献から言えること～」、津田充子氏（母性看護CNS、千葉県立保健医療大学）から「計画無痛分娩～A病院における実態から～」話題提供をいただき、無痛分娩の管理や教育上の課題について情報共有・意見交換を行いました。

第8回は「精神障がい者をパートナーにもち子育てする夫の体験（仮）」をテーマに1月21日（日）14:00-16:00に開催します。

TSUMUGU会は母性看護領域の高度看護実践に関する情報交換や話題提供とともに、現場で活躍するCNSとの交流会も兼ねております。母性看護CNSの方のみならず、テーマにご関心のある方々も参加できます。TSUMUGU会の詳細については委員会からのメールや、ホームページでご確認ください。

【問い合わせ先】

日本母性看護学会 高度実践看護推進委員会
委員長 角川志穂
boseiapn@gmail.com

2) 母性看護CNSメーリングリスト

母性看護CNSのメーリングリストを設置しています。現役母性看護CNSの方々のみならず、母性看護CNSの活動に興味ある学会員はどなたでも参加できます。

2021年度のML立ち上げから3年目となり、登録者は100名を超え、母性看護の高度実践看護に関する情報交換や話題提供、共同研究の呼びかけなど、ネットワーク構築に活用されています。

詳細は学会HPよりご覧ください。(https://bosei.org/cnsinfo.html#h09)

3. 編集委員会

日本母性看護学会誌が電子ジャーナル、電子投稿システムへ移行して4年目に入りました。皆様のご協力で投稿数も少しずつ増えております。学会誌は年2回発刊で、10月に24巻1号、2024年3月には24巻2号の発刊予定です。

2023年12月までに採用された論文は2号に掲載予定です。投稿をお考えの方は、2023年3月に投稿規定と執筆要領を改訂しておりますので、確認してからご投稿をよろしくお願いいたします。



1. 2023年度一般社団法人日本母性看護学会総会報告について

2023年度の総会は新型コロナウイルス感染防止のため非参集型の「書面表決による総会」として開催し、社員の皆様に書面にてお諮りいたしました。社員の皆様の回答を得て、6月23日に本総会の成立となりました。詳細については、学会ホームページに掲載された議事録（7.25掲載）をご参照ください。

2. 2022年度理事会について

理事会は通常理事会4回（Web）、書面理事会は4回開催されました。

3. 第26回日本母性看護学会学術集会のご案内

2024年6月16日（日）工藤美子（兵庫県立大学看護学部教授）のもと、第26回日本母性看護学会学術集会を開催いたします。テーマは「女性の“生きる”を支える～Health & Rightsを基軸にして～」です。現在のところ、対面開催と講演のオンデマンド配信を予定しております。皆様のご参加をお待ちしております。

4. 大学教員の皆様へのお願い：職位の登録をお願いします！

当学会は、日本学術会議協力学術研究団体への登録をめざしています。国から公的学会として認定されることで、診療報酬改定等の政策決定に対する影響力が高まることが期待されます。登録の基準は、「大学の専任教員」及び「学位を有し、医療機関に所属して研究者の立場で看護の質評価や改善等に関わる看護職」が半数以上であります。未だわずかに条件に届いておりません。

そこで、会員の皆様、特に大学教員の皆様に情報の登録をお願いいたします。

*該当する会員：大学の専任教員である会員

*お願いしたいこと：専任教員であることがわかるように、登録情報の「所属先役職名」の項目に、職位を入れていただきたい。

現在、大学に所属する会員の約1/3の方の「所属先役職名」が空欄になっています。ここに、教授、准教授、講師、助教等、または名誉教授、特任教授等の職位を追加していただきますよう、お願いいたします。

また、ご所属変更やメールアドレスの変更などがございましたら、この機会に更新をお願いします。学会から会員向けのメール配信で残念ながらメールが配信されないケースがございます。メールアドレスの変更もどうぞよろしくお願いいたします。

登録方法は下記をご参照ください。

① 日本母性看護学会マイページからログインします。

日本母性看護学会マイページ

<https://service.gakkai.ne.jp/society-member/mypage/JSMN>

会員番号・パスワードをお忘れの場合は、マイページに記してある再発行のご案内をご覧ください。

② 「会員情報の照会・更新」→「所属先」をクリックします。

③ 「所属先役職名」には、教授、准教授、助教等の職位を入力してください。

④ 会員情報の変更がある方は、この機会に更新をお願いします。特に、学位を取得された方は、「その他」をクリックして学位を入力してください。

5. 2023年度会費の支払いについて

本学会は皆様の会費で運営されております。2023年度会費未納の方は、事務局よりお送りしている郵便振替用紙（青色払込取扱票）を用いるか、あるいは下記の口座番号へ会費の納入をお願いします。

年会費：8,000円

① 郵便振り込みの場合（青色振込取扱票）

口座番号：00120-8-386309 加入者名：一般社団法人日本母性看護学会

② 銀行振込の場合

ゆうちょ銀行 ○一九店 当座 0386309

事務局（会員窓口）

一般社団法人日本母性看護学会事務局

（株）ガリレオ学会業務情報化センター内

〒170-0013東京都豊島区東池袋2-39-2-401

TEL：03-5981-9824 FAX：03-5981-9852

E-mail g031jsmn-support@ml.gakkai.ne.jp

学会HP <http://bosei.org/index.html>

編集後記

日本母性看護学会広報委員会の取り組みの1つである、日本学術会議などの情報を会員に定期的に発信する定期配信メールを行うようになって1年が経つ。この定期配信メールが、会員の皆様にとって有用であることを期待し、今後も定期配信を継続していく。

また、本ニュースレターは「ポストコロナ」をテーマにした内容で構成されている。最近では、感染症の情報を聞きつつも、私の周りの生活は落ち着きを取り戻しつつあると感じている。コロナ前と同じ生活に戻ることはないが、会員の皆さんの臨床・教育・研究が落ち着いた中で進められることを願っている。

(広報委員会：大滝)



発行人：石井邦子
発行日：2023年10月31日
広報担当：中村康香、大滝千文、菊地圭子
発行：一般社団法人日本母性看護学会
〒170-0013 東京都豊島区東池袋2-39-2-401
株式会社ガリレオ
学会業務情報化センター内
一般社団法人日本母性看護学会事務局
Tel：03-5981-9824 Fax：03-5981-9852
E-mail：g031jsmn-mng@ml.gakkai.ne.jp
